

道標

どうひょう
d o h y o

年間特集 「おそれ」

第三回・病気を怖がる人間の怖さ 藤原 辰史さん

2020 夏季号

連載

あなたのいのちの物語 共振する音と笑いといのち

伝承を科学する 自然の景物と修羅

道しるべ 地藏盆





年間特集

「おそれ」

第三回

藤原辰史

「病気を怖がる人間の怖さ」

疫病が流行るとき

14世紀のヨーロッパでペストが大流行し、三〇〇〇万人の人がなくなつたとき、ユダヤ人の虐殺が起こつたことはよく知られている。村上陽一郎の『ペスト流行』(岩波新書、1983年)には、当時のアヴィニヨンの外科医ギ・ド・シヨリアクの手記『大外科学』の一節が紹介されている。

「多くの人びとが、この大疫病

について、自分勝手な解釈を考え出した。ある地方では、ユダヤ人たちが世界の毒をまいているのだと考え、数多くのユダヤ人がそのために殺された。またある地方では、不潔な貧民たちが、空気や食物、飲物を汚すのが原因だとして、貧民たちを街中から追放した。またある地方では、貴族が疫病の元凶だということになり、貴族たちは平安に街を歩くことができなくなつた」(114頁)。

村上は、スイスのジュネーヴの事例も挙げています。「町民は犯人と目されたユダヤ人を処刑する死刑執行者に挙つて志願した」(141頁)。それはまさに、「ペストの流行の如き」ものだと村上は述べている。

また、百年前のスパニッシュ・インフルエンザでは、四〇〇〇万人から一億人が亡くなつたが、やはりデマは流れた。アメリカでは、当時交戦国だったドイツが、潜水艦でアメリカの港まで侵入し、病原菌をばらまいたという噂が広まつた。また、心配しすぎるな、という別種のデマも流れた。ジョン・バリーの『グレート・インフルエンザ』(平澤正夫訳、共同通信社、2005年)によると、『レビュープレス・アンド・レポーター』紙は、インフルエンザを一切報じず、1918年10月4日になつて初めて「天罰」が最初の犠牲者に降つたと報道し、感染が広

まつたあとでさえ、「恐怖は病気よりも多くの人を死に陥れる。弱音を吐く者や臆病者が最初に犠牲者となる」と警告した(354-355頁)。

危機が露呈するもの

歴史を省みることは、己の世代の到達点を知ることではほとんどない。己の世代の未熟さを知ることである。文明化された21世紀の社会は、ついにこのような偏見の眼差しから自由になつた、と感じる人はいまほとんどいないだろう。中世社会の狂乱や百年前の精神主義と人間の状況はそれほど変わっていない、と思わざるをえない。どれだけ高速の列車が列島を駆け抜けようと、どれだけ通信技術を獲得しようと、どれだけ多くの情報と接することができるようにも、恐怖に駆られ、ある特定の人間に対し攻撃を仕掛ける感覚は、ほとんどアップロードできないのではないのか。

歴史を省みることが、

己の世代の未熟さを知ること。

危機は、人の未熟さを露呈する。

新型コロナウイルスによる新型肺炎が蔓延する中で、たとえば、次のような行動が目立つようになった。日本で、ある男性が、訪問看護師に対し、「なぜ看護師が外を歩いている」「お前のせいで感染がうつるだろう」と問い詰め、訪問介護について説明しても「そんなことは知らない。看護師が外を歩くんなんて言語道断だ」「お前の患者にもコロナはいるだろう。そいつの家を教えろ」と絡まれ、「とにかく迷惑だから外を歩くな」と言われたという。こうした経験を看護師はツイッターで公表し、話題になった。この看護師へのイン

他者を固定化し否定する心理の根源には

臆病さの隠蔽がある。

タビユー記事では、そのツイッターへのコメントで「同じようなことを言われた」というものがあつた、と答えている。(青木正典「お前のせいで感染が拡がる」「コロナ差別」に遭った訪問看護師が、あえて体験をツイートした理由「J-CAST ニュース」)。

根拠なき恐怖と人文知

日本のみならず世界でもこのような事例が多数報告されている。

る心理の根源には、自分の力の誇示であるのではなく、臆病さの隠蔽がある、と私は感じる。

根拠なき恐怖は、誰でも抱く。それが見えないものであればなおさらだ。私だって、夜中に墓地を一人で歩くのは怖い。だから、ここにこそ人文知が必要である。このような恐怖と冷静に付き合う知性や、見えないものに対して「恐れ」「攻撃」以外の構えを作り上げるために、想像力を駆使するしぶとさを身に付けることだと私は考える。

藤原辰史 (ふじはら・たつし)

1976年生まれ。京都大学人文科学研究所准教授。主な著書に『ナチス・ドイツの有機農業』(第1回日本ドイツ学会奨励賞)、『カブラの冬』、『ナチスのキッチン』(第1回河合隼雄学芸賞)、『食べること考えること』、『トラクターの世界史』、『戦争と農業』、『給食の歴史』(第10回辻静雄食文化賞)、『分解の哲学』(第41回サントリー学芸賞)がある。2019年2月には、第15回日本学術振興会賞受賞。



Your Spiritual Stories
あなたの物語
いのちの物語

9話目

「共振する」

音と笑いといのち

木下順二

『いづなり』

「むかしむかしのこんだ。右のほつぺたに大きなこぶをぶらさげおつて、そのせいかわかんねえが、あまり人ともつきあわねえ、ちいっとばかしかわつたじいさまがおつたんだそうだ」。孤独な木こりのじいさまのこぶが鬼にとられてなくなるといふ話だ。

このじいさまは「歌がえれえすき」で、いつも仕事しながら、なにやらひとりでヒュンヒュンと鼻でうたうくせがあつた。そういえばこの短い物語は人の心を共振させる音楽みだいだ。ある日、突然暴風雨になり、ちようど「いいあんべえのところ」に大きな木があり「でつけえうろが、あいてる」。そこで休んでいるうちに寝いってしまった。

気がついてみると、「ガジヤガジヤポジャポジャと、なんやらおせいがおしよせてくるような声がかきこえてくるでねえかよ」。鬼

が百人ぐらいいもやってきて、「暗やみんなかにずらつとならんで、ボツボツと赤え小さな火をともして、ギューギューとはだかのからだをすりあわしてすわつてゐるでねえか。おら、もう、はあ、おつかねえにもなんにも」ひっそりとかまえていた。

やがて酒盛りになり、「そうするうちにやあ、あつちこつちで立つて舞いだしただな」。そのはやしというのが「トレレ トレレ / トヒヤラ トヒヤラ / ストトン ストトン」。親方がいちばんよっぱらつて、「どうだ、もつとおもしれえ舞を舞うやつアーびきでもいねえか」。じいさまは舞いたくなつてしまふ。がまんしきれずうろからとんで出て、舞いだしてしまふ。

死にもぐるいで舞いまくりまた歌う。その歌がまた「くるみはばつばあ はあくずくう おさなきやあつのおつかあがあのおちやあるるう すつてんがあ」と訳がわからない。ところがこれを受ける。鬼たちが「いつせいにやらといっしょにとびはねて、ま

の三層べえぐれえも、さわぎたつてでねえか」。いつのまにやらみんな輪になって大きな木のまわりをまわり、声をそろえて「一ボコ二ボコ 三ボコ 四ボコ」とわめき出す。「おらあここだと思つたから、おらもたして、五ボコッ とやらかした」。これがまた受ける。

これを何度か繰り返すと、しんとなくなつてしまふ。またおつかなくなるが、親方の鬼が言う。「やいじい、おらたちは長年この山で遊んできたものだが、今夜ほど、おもしれえ遊びをしたことアなかつたぞ。またここへ来いといふので、おそろおそろ「へい、きつとまたきます」と答えるが、皆が「本気かどうかわかんねえぞ」と疑い、じいさまの大事なものを取り上げてしまふといふことになる。ぶるぶるぶるぶるへたつてしまふ。

「あとから思案してみりや、あのこぶがぶらりとおらのほおげにぶらさがつてたばかりに、おらどれほどつれえ思いをして、世のなかすごしかわかんねえわけのものだが」、これをとられちゃ「生きる瀬はねえ」ぐらいで必死だった。気づいてみれば、まわりには誰もおらず、静かで夢からさめたようだ。そしてこぶはなかつた。おしまい。「あつはつはつは」。

意味不明の擬声語擬態語が続々繰り出されるうちに、登場するじいさまや鬼とともに内なるいのちが躍動し、読み手の心もいっしょに踊りだし笑い出す。恐れと不安と孤独の壁を笑いが取り払う。人はこんないのち火を内にもつている。

島蘭進（しまぞの すずむ）

1948年生れ。東京大学教授を経て、現在、上智大学大学院実践宗教学研究所教授、著書に、『神聖天皇のゆくえ』（2019年5月）『明治大帝の誕生——帝都の国家神道化』（2019年5月、春秋社）、『ともに悲嘆を生きる』（2019年4月、朝日新聞出版）、『いのちをつくつてもいいですか』（2016年、NHK出版）、『宗教を物語でほどく』（2016年、NHK出版）がある。



伝承

科学

する

自然の景物と修羅

能楽には修羅物と呼ばれる作品群がある。

修羅物の主役（シテ役）は、武将の幽霊である。幽霊は、自らが見聞した戦い、あるいは自ら経験した戦いについて物語り、みぶりを加えながら再現する。そうして聞き手（ワキ役）の前から姿を消す。

修羅物という名称はもちろん、六道のうちの「修羅道」に由来する。修羅道とは、人間界の一つだけ下に位置する世界で、そこに落ちて生きる者は日々、戦いに明け暮れる。苦しみや怒りが絶えない世界だとされる。

能においては、自然の景物が修羅道の様子に見立てられることがある。修羅物の人気作品のひとつ「清経」をとりあげて確認しよう。

「清経」は、通夜をする妻と従者の前に、平清経の幽霊が現れ、自らが最期を迎えるまでの様子を物語る作品である。幽霊による物語は次のように進む。平氏は源氏を逃れて九州の宇佐に向かったが、頼みとした

宇佐八幡にも見放され、一門は気落ちする。清経は「白鷺の群れ居る松」

が源氏の大軍に見えてしまうほどの恐怖におののくことになる。「露」浮草」「あだ波」「旅」など、命のはかなさを象徴する言葉が、次々と心の中に去来する。

ある早朝、清経はひとり船の甲板に出て、笛を吹き、歌を歌った。そして西に傾く月を追うようにして「南無阿弥陀仏」と唱えつつ、船から身を投げる。

ここまで語り終えた幽霊は最後に、修羅道に落ちた現在の様子を見せる。以下、歌詞を示す。「さて修羅道に落ちこちの、立つ木は敵、雨は矢先、月は精剣、山は鉄城、雲のはたてを突いて、橋慢の剣を揃へ、邪見の眼の光、愛欲貪痴、通玄道場、無明も法性も、乱るる敵、打つは波、引くは潮、西海四海の、因果を見せて、これまでなれや、まこと最後の、十念乱れぬ、御法の船に、頼みしままに、疑ひもなく、げにも心は清経が、く、仏果を得しこそ、

ありがたけれ」。

この前半部分では、修羅道での戦いの様子が描かれる。修羅道に落ちると「立木→敵」「雨→弓矢」「月→剣」「山→鉄の城」「雲→旗」「波→打つ（攻撃）」「潮→引く（撤退）」のように、自然の景物が、修羅の世界そのものに見えてしまうという。

もちろんそれは幽霊自身の妄想である。妄想を生み出すのは、歌詞に見えるとおり、幽霊自身の「橋慢」「邪見」「愛欲」「貪痴」などの心である。幽霊は最後、「十念」「御法」という仏教の力によって、心の浄化をえる。

瀬戸内海の家や島々そして周辺の陸地は、のどかな美しい場所だ。そうした場所を戦乱の巷に塗り替えて

しまった源平の武将たちにとって、月や雲や波などの美しい自然の景物が、突如として敵となつて我が身に襲いかかることは、戦場の現実そのものである。

幽霊を主役とする能の作品は、主役が記憶を語ることを主なテーマとする。自然の景物、そして風景は、主役の記憶を触発し、心を波立たせる、重要な触発剤なのである。

藤田隆則（ふじた・たかのり）

1961年山口県生まれ。大阪大学卒業。博士（文学）。京都大学助手、大阪国際大学助教授、ミシガン大学招聘教授をへて、現在、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授。専攻は、民族音楽学。主な研究対象は、日本の能・声明などの中世芸能および音曲。著書に『能の多人数合唱』『能の地拍子研究文献目録』『日本の伝統音楽を伝える価値―教育現場と日本音楽』『能のノリと地拍子―リズムの民族音楽学』など。現在は、日本の伝統音楽を次世代に伝えていくための応用的研究に従事。



清経の幽霊（シテ：浦田保親）
(C)Yasuchika Urata All rights reserved

地蔵盆

地蔵菩薩は仏教実践の根幹である慈悲の無限、平等性を表すために、大地がすべての生命を蔵し、産み、育むように、慈悲は人々を平等に包み導き、正しく育てる所から付けられた名である。

古代インドのサンスクリット語では「クシテイガル」と呼ばれる。「クシテイ」は「大地」、「ガルバ」は「胎内」「子宮」を意味する。「地蔵」とは大地と母胎の生育力を喩えた名詞と言える。

現在、自分たちは自分が立っている足許を顧みることがあるか。すべての生命を産みだし、支え、生きる場を提供し、しかも分け隔てはない。それのみか全く報酬を求めない。自分たちが大地を見るときは「一坪いくら」。

さて、地蔵盆だが、この仏事は全国的ではない。京都や大阪では、夏休みも終わりに近づいた、八月二十三日・二十四に勤められる。日頃は目立たないお地蔵さまだが、この両日は華やかに提灯が灯され、沢山のお供物が供えられる。町内のお年寄りや子供た

ちが集まってお給仕をする。元々は子安地蔵などと言われるように子供中心のはずだが、最近では少子化のためにお年寄りが多くなっている。チョット寂しい。

街の角かどに立たれ往來の安全、町内の安全、何よりも道で遊ぶ子供たちを守りつづけてくださって来た。ただ守られている側はあまり自覚がない。だからこそ慈愛を込めて見守ってくださるのだろう。お寺から街角に出られた理由はそれだろう。最近の街角には監視カメラが立って、私たちの生き様を密かに見つめている。そこに慈愛はこもっているのか。

地蔵菩薩は街角だけでなく、迷いの六道を救うといわれている。また、賽の河原で鬼に追われる子供たちをも助けられる。生き長らえることのできなかった悲しい生命を。悪業のため迷いを重ね、苦しむ者のために走り回っておられる。手に持つ錫杖は止まることのない慈悲の心を象徴している。存覚上人は「地蔵菩薩」と「法蔵菩薩」とは同体異名と言われている。味わい深い言葉である。

編集後記

アメリカが燃えている。ミネアポリスで、黒人男性が警察官に殺害された。これをきっかけに、抗議の声が燎原の火の如くにアメリカ全土に燃え広がった。デモの一部は暴徒化し、軍の出動も検討されている。

アメリカにおける人種間格差と差別の問題は非常に根深いものである。私は語る言葉を持っていない。しかし、抗議が暴動にまで発展した背景に、コロナ禍による社会不安があったことは想像に難くない。藤原先生がお書きくださったように、不安は容易に攻撃に転化するものだからである。

仏教で修羅道は争いの世界だとされるが、それは、周囲を「敵」と認識する心の作用が描き出す世界である。分断が進む世界の中で、自ら「敵」を描き出してはいないか、あらためて我が身を振り返りたい。

このたびの騒乱において、デモ隊の群衆を前に、無防備にひざまずくマイアミ市警の警察官たちのすがたが一部で話題となっていた。そのすがたに、「敵」を作り出すのではない、不安への向き合い方のヒントを見た気がした。
(釈圓眞)

読書
表紙の絵

オリンピックと習近平中国国家主席の来日が延期になってから急にコロナニュースばかりになり、恐怖感を持つようになりました。天災や疫病は親鸞聖人や蓮如上人の時代にもありました。蓮如上人は「当時このごろ、ことのほかに疫病とてひと死去。これさらに疫病によりてはじめて死するにあらず。生まれはじめしよりして定まれる定業なり。…」とおっしゃっています。昔も今も道理を知り、八正道の実践が問われる時です。本を読み、自身を考える良い時間と思つてほしいです。

畠中光亨(はたなか こうきょう)

日本画家／インド美術研究家
／真宗大谷派僧侶

仏壇仏具のことは
お気軽にお問い合わせ下さい

株式会社 廣瀬佛壇店

☎0120-81-7065 ☎06-6771-7007
タウンページ <http://nttbj.itp.ne.jp> (詳細地図有り)
〒543-0062 大阪市天王寺区逢坂2丁目1-12
(四天王寺西門交差点 西へ30m)

天岸淨圓 (あまぎし じょうえん)

1949年(昭和24年)生まれ。本願寺派布教使。行信教校講師、大阪教区東住吉組西光寺住職。